

実践報告

札幌市立光陽中学校

(1) 研究内容

研究課題：「人権教育を基盤とした学校づくりに関する研究」

- 自己肯定感、自尊感情の醸成を図る教育

(2) 実践の内容

【実践①】松本哲也講演(トーク) & ライブについて

○ ねらい

- ・子どもに夢をもたせる。自己肯定感、自尊感情の醸成を行う。
- ・心に響く真のメッセージを子どもへ伝える。

○ 学習内容

- ・3月8日(火)5・6校時 全校道徳 「松本 哲也 講演&ライブ」興正学園共催
松本さんの生い立ち、家庭環境、児童養護施設での暮らし、児童自立支援施設への入所、教師との出会い、音楽との出会い、ミュージシャンを目指す、ネパール支援の取組、3.11直後の状況、東北復興支援、卒業生へのエールなど。
非常に感動的な内容で、たくさんのメッセージが届けられた。



【実践②】自己肯定感、自尊感情の醸成について

○ ねらい

- ・自己理解があってはじめて、他者を理解し、他者との良い人間関係を築くことができる。
- ・道徳の時間を中心として、各教科、総合的な学習の時間、特別活動などを通して、一人一人が輝く瞬間を導き、創造する。

○ 学習内容

- ・学校祭、旅行的行事、キャリア教育等において、それぞれが自己肯定感を抱けるような成功体験、達成感をもたせる。
- ・「アセス」「ソーシャル・スキル・トレーニング」の計画的な実施
- ・教育相談活動の充実(スクールカウンセラー、心のパートナー、学びのサポーター等との連携)

(3) 研究のまとめ

① 成果

- ・ 全ての活動(教科、特別活動、道徳、総合的な学習の時間、行事、儀式)の中で「人権教育」は扱うことができるという認識ができた。
- ・ 日頃から「人権教育」を意識して、教育活動を進めることにより、「命」の大切さについて考えさせるとともに、他者の痛みが分かる子どもの育成を図ることができた。
- ・ 国際理解教育を教育課程に明確に位置付けることにより、差別問題や貧困について深く学ばせることができた。
- ・ また、情報モラル教育においては、「ライン」等でのやりとりで、人によって捉え方や感じ方が異なることを実体験させることができた。
- ・ 「あいさつ」や「声かけ」などが自然体でできるようになった。
- ・ 少しずつではあるが、子どもに自己肯定感や自尊感情の高まりを感じる言動が増えた。
- ・ 「人権」をより自然に意識できるようになった。
- ・ 子ども一人一人の居場所づくりについて、教師の意識が高まり、子どもへの気配りをより一層きめ細かくできるようになった。

② 課題

- ・ より多くの小学校との連携が可能であった。(それぞれの学校での取組が連動していなかった。)
- ・ まだマイナスの言葉、ネットによる中傷はゼロとはなっていない。
- ・ たくさんある「点」での活動を「線」へとつなげていかなければならない。
- ・ 子ども自身の自主的な活動(生徒会活動も含む)へと広げていきたい。
- ・ 上記の活動が日常的なものとなることに期待している。
- ・ ピア・サポートを次年度からの新たな取組としたい。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- ・ 「人権」は、自然に授業や諸活動の中にあり、後で、「人権だったんだ」と気付く内容も悪くない。
- ・ 「人権教育」が1校だけの取組に終わらず、近隣校との同内容の取組ができれば、地域に根ざした活動となる。
- ・ 子どもの活動のみでなく、保護者や地域との連携を図ることにより、教職員の異動などあっても、永続的な取組となっていく。
- ・ 教育課程の中で、それぞれの活動をつなぐ体系的な推進組織、全体計画も必要であると感じる。
- ・ 教職員についても「人権教育」や、そこに至るアプローチで必要なスキルなどの対外的な研修も必要である。
- ・ 不登校生徒や心の中にわだかまりのある子ども等も参加できる活動としていきたい。